

飯沢匡喜劇集 I

飯沢匡喜劇集

第1卷

収録作品

藤原閣下の燕尾服

北京の幽霊

鳥獣合戦

解題・演劇的自伝(1)

未来社刊

飯沢匡喜劇集 第一卷

一九六九年六月廿五日 第一刷発行

定価 七五〇円

©著者 飯 沢 匡

発行者 西 谷 能 雄

発行所 株式会社 未 来 社

東京都文京区小石川三の七
電話(八一四)五五二一代表
振替(東京)八七三八五番

本文整版〓山洋印刷

本文印刷〓ひろせ印刷

装本印刷〓形成社

製 本〓今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえます。

飯沢匡喜劇集 第二卷 目次

藤原閣下の燕尾服 3

北京の幽霊 27

鳥獣合戦 135

解題 207

演劇的自伝(一) 214

藤原閣下の燕尾服

無型劇場 第四回公演

伊澤紀作(創作九月号記載)

藤原閣下の燕尾服 一幕
演出 菅原直吉 監督 松田定次郎

松田定次郎 脚本 菅原直吉
世襲金塔山 三幕
演出 松田定次郎 監督 松田定次郎

場所 飛行会館
日時 九月廿七八九日(三回)
毎日より午後六時半開演

出演者
市川セ江 市川團次郎 市川吉三郎 市川左近 市川嘉道五郎 尾上梅助 市川米七門 岡美佐子

登場人物

藤原閣下 某政党の領袖

智太郎 その子

松井 藤原家の書生

みよ 同じく女中頭

本山 閣下の秘書

男 インチキ新聞の記者

橋本 智太郎の友人

時 昭和初頭、政党政治、華かなりし頃

藤原邸の書生部屋である。右隣は襖を境にして廊下があり、これに電話がついている。部屋には一人の青年がいて何やら怒鳴りながら歩きまわっている。彼は目に見えぬ誰かにしゃべっているらしい。

智太郎 俺は今、真面目で話をしているのだぞ！ 俺が馬から落ちて脳を悪くする前に……（急に話をやめて）お前たちはどうしたのだ！ えっなんだ！ 俺が気違いか、気違いでないのか考えているのか？ ああ、気違いだとも！ 確かに気違いに相違ないよ！（急に恐しい顔つきをして）そうだ！ ああ神の御名によつてお前たちは跪くのだ。

松井 （すなわちこの部屋の本当の主が急ぎ足でやつて来て襖を開ける）

智太郎 膝をつけ！

松井 今お呼びになりませんでしたか。私のことを。

智太郎 俺はお前たちに命令する。みんな俺の前に跪け！

松井 はあ？

智太郎 そうして額を地につけて三度お辞儀をするのだ！

松井 お辞儀をするんですか？

智太郎 （じりじりしたように）さあ、頭を下げる、頭を下げる（松井一ぺんだけお辞儀する）お前たちは気違いの前に出たらそうしなければならぬのだ。

松井 （さてはそうかといった顔をする）

智太郎 （卓子に行つてその上の台本、すなわち彼が今一所懸命憶えこんでいる所のピラデルロのヘンリイ四世を繰り、次の科白を讀もうとする）ええと、それからなんだっけな。あっそうか。

松井 今のはお芝居の科白なんでございますか。

智太郎 おい駄目だよ、立っちまっちゃ、僕がさもあきあきしたと言つた表情で、『立て羊ども！』と言つたら立つんだ。それまではどう如何にも意志のない人間のように従順にちようど羊みたいに跪いているんだよ。

松井 ええ、もう結構でございますよ、どうもそういうふうなお芝居のようなものは私には出来ないんでございますから。

智太郎 今うまかったよ。なかなか。

松井 それは私、本気にしていたもんでございますから。

智太郎 人馬鹿にしてやがらあ、僕を氣違い扱ひにしたってんだな。

松井 いいえ、そんなこと……（何か弁解しようとするところに電話がかかって来るので出る）はあはあ、さようでございます、はあはあ、御在宅でいらっしやいます。ただいま卓上電話につなぎますから少々お待ちくださいませ（送話口を掌で押えて、奥の女中部屋に向って）総裁からお電話、閣下に申し上げてください。ご書斎の電話の受話器はずれていてどうね、かかってたら切れてしまいますから。

みよ （智太郎の小さい頃の乳母出て来る）大丈夫よ。今とりさんが申し上げに行ったから。さあ、おつなぎなさいな、いよいよかかって来ましたね。

智太郎 （台本を繰る手をとめて）うるさいぞ。

みよ はいはい。

松井 （切換のスイッチを入れる）大丈夫はずれてるだらうな、総裁からの電話だから切れたりすると……。

みよ あなたは心配性だね、ほんとに。松井さん。

松井 （時計を見ながら）もう、そろそろ親任式に参内なさるんでしょう、総裁は。これは下交渉じゃないかな、今度家の閣下は何大臣におなりになるんだろう。

みよ 私は鉄道だと思うけど。

松井 ああ、貴方もそう思う？ 僕もそう思いますよ、新聞にや、また通信なんて書いてあるけど。そんなことはある筈がない。

みよ そうですとも、通信なんかでたまるもんですかね。

智太郎 （科白を怒鳴る）立て！ 羊ども！

みよ

（思わずびっくりする）

松井

智太郎 （少し間を置いてから）そうだ！ お前たちはただ俺の命令に従っただけだ！ そうだ人を言葉で押し潰すのは何でもないことだ、蠅をつぶすようなものだ！

みよ 智様ともどうかなさいましたか。

松井 いいやあれはお芝居の文句なんですよ、うっかりしているとびっくりするけれど。

みよ まあ恐しいこと、あんな声をお出しになって。

智太郎 うるさいな、用事がなかったらさっさと帰ったらしいじゃないか。わざわざこの廊下へ来て話してるやつがあるもんか。

みよ 申し訳ございません。ほんとにここは、お下の部屋にも近こうございますし電話もありますしね、そりやお食堂よりはマシでございますがね、おやかましゅうございましょうけど、まあ智様、お我慢なさいませよ。何しろわが党に大命降下してお父様が大臣におなりになる日なんでございますからね、どうしたって家はごたつきますんですよ。

智太郎 馬鹿言え、大臣になるなんて何が判ってるもんか。総理大臣だけ定ったんじゃないか、何でもいいから早くあっちへ行ってくれ、もう時間がないんだから、三時間までにこれみんな憶えて稽古場に行かなくちゃならないんだ。ほんとにうるさいやつだな。

みよ はいはいでも総理大臣さえ定ればもうお父様のも定ったようなものでございますよ。家の旦那様はきつと鉄道大臣におなりですよ。

智太郎 いいよ、そんな話。どうだって。

みよ (去る)

智太郎 (松井に) 早く行けよ。

松井 電話をきってから参ります。(電話の下の腰掛にかける)

智太郎 ちえっ！(境の襖を仕切る) 絶対に入ってきては困るよ。

松井 でも私の部屋ですから用事がございましたら入りますけれどよろしゅうございますか。

智太郎 いけないよ、僕の生死にかかわるもんだからね、この科白を憶えこむことは。明日の公演にはどうしたってうまく演らなくちゃならないんだ。日本でもこの役は演った人はいんだぞ。ドイツじゃこの「ヘンリイ四世」にはモイシがなったんだからね、お前なんか知らないんだろうけど、とにかくモイシがやるような大役なんだからね、ちょっとやそっとじゃ出来ないんだよ。とても、むずかしいんだからね、判ったかい、だから困るよ、入って来ちゃ。

松井 でも私困ります、いろいろその部屋には私の必要なものがあるんでございますから。

智太郎 そんなら僕の部屋を空けるよ、お客さんも他の

部屋にうつすんだ。

松井 どのお部屋も満員でございますから、お茶の間にもいらっしゃいます。

智太郎 そんなら僕の部屋にいるお客さんをここに連れて来るんだ。

松井 そんな失礼なことは出来ません。

智太郎 どうせいるのは陣笠連だろう、かまうもんか。

松井 この部屋は新聞記者でございます、もうじきやって参ります。

智太郎 じゃ僕のいる所はなくなるじゃないか。

松井 さようでございますよ。

智太郎 空いてるのは女中部屋と台所と便所だけだ！

松井 さようでございますよ。

智太郎 ああこれから家を建てるんだったら蓄音器屋のレコード試験室みたいな小さな部屋をたくさん作ればいいんだ！ 息子の部屋にまでお客を入れるなんて大體間違ってるんだ！

みよ (出て来る) さあさあ電話お済みになりましたから切ってください。ずいぶん長いお電話だったわ。

松井 (切りながら) そうでしたね、確かに。下交渉

らしいですね、もちろん参内からお帰りになってもう一ぺんかかって来るだろうけれど。

みよ そうよ、私もそう思ってそっとお書斎のドアの

所まで行ってみたんですがね、何か聞えるかと思つて、でもちつともおっしゃってること聞えないのよ。

智太郎 おい、また始めるのかい。

みよ はいはい、でも智様はお嬉しくおありになりますの、お父様が大臣におなりになるとしましたら。

智太郎 心配だよ、明日の公演の方が。

みよ まあ親不孝な方ですのね。前逋信大臣におなりの時は二三日前から毎日お母様と、一緒にお宮にお詣りにいらっしゃいましたっけね。今度はお母様がおいでにならなくて、ほんとに私悲しゅうございますわ。

智太郎 もういいったら、ほんとにおしゃべりだよ。うるさい。行けたら。

みよ はいはい。(去る)

松井 (電話が鳴るので出る) はいはい、さようです、え？

智太郎 (科白を始める) 明日はブレッサノンで二十七人のドイツ人とロンバルドの僧正がわしと一緒にグレ

ゴリイ七世の供書に署名をすると申すのじゃ。

松井 (うるさくて電話が聞えない) はあ? はあ?
智様ちよっとお静かにお願いいたします。

智太郎 法王が何じゃ、法王と言ってもただの生臭坊主に過ぎぬではないか!

松井 はあ? はあ? ちがいますよ、ええ番号は合っていますかね(みよが盆を持って出てくる)お茶屋? 料理屋のことですか、あのほら、待合のことですか。

みよ あなたに言ってるの。

松井 ああ、飲むお茶を売るお茶屋ですか、いいえ、そんなもの売っていませんよ、ほんとですよ。

智太郎 いい加減にしろよ。

松井 こちらは前通信大臣の藤原甚吾閣下のお邸です。

智太郎 余計なこというなよ。

松井 はあ、さよなら。(切る)

智太郎 なんだい?

みよ お麦湯でございますよ、おのどがお乾きでしょうから持ってまいりました。

智太郎 麦湯?

みよ 役者さんはおのどが大切でございますからね。

辛いものや苦いものを召し上るとお声が悪くなりますので、お麦湯ならよいそうでございますから、それから砂糖もよろしいそうで入れてまいりました。

智太郎 当り前さ、砂糖が悪くてたまるか。

松井 (二人が話している途中でまた電話が鳴るので出る) はあ? はあ、はあ、さようでございます、はあ? (小さな声で) またお茶屋と間違っちゃって来た、こちら藤原です。ええ四谷の一三二七番、いいえ、二七番です、一三〇〇ですよ、ええ。そうじゃありませんよ。判らない人だな。

みよ 松井さん気がきかないね。私にお貸しなさいな。

(受話器を受取る) もしもし、はあはあ、さようでございます。毎度有難うございます。はあはあ、川柳を一斤、はあ、さようでございますか、さっそくお届けいたさせます。吉田さんでございますね。かしこまりました。毎度有難うございます(切る) どう? こうすりゃもうかかって来ないですよ、なにしろこっちは大臣におなりになるうっていうんですもの、国家を対手にしてるんですからね。川柳の一斤やそこら問題じ

やありませんよ。全くね。

松井 なるほどね。

智太郎 また始めるのか（電話がまた鳴る）ほらかかって来たじゃないか、また葉茶屋だろう。

みよ よそからでございますよ。（去る）

松井 （出る）はあはあ、さようでございます。はいらっしゃいます、少々お待ちください。智様、橋本さんから電話でございます。

智太郎 （出る）もしもし、うん、今やってる。昨日の晩はね、あれから二時半までやったんだけどね、まだ四十頁残ってるんだよ、今朝も早く起きてやってるんだけどね。今日と来たら親爺の客が多くてね。一人ずつ別々に部屋に通すんでね。部屋が足りなくて僕の部屋もとられちゃったんだ、今書生部屋でやってるんだけどやっぱり落ちつかなくてね、まるで駄目だよ。うん、でもそんなこといって公演の三日前に役の振替なんていうのが間違いだよ。今日は三時からだね。ああそれまでに十頁出来たら上出来だろうよ、仕方がないよ。ともかくまわりときたらとももうるさいんだから。じゃさよなら、ああそうそう、どうだい、昨日の

燕尾服のズボンは。はけるかい。短くなかった？ そうかい、まあ、そのくらいならズボン吊りを少しおろしてごまかすんだね。それから斬られて倒れる時ね、少し注意してくれ給え、まあよく舞台の上を掃除して置いて貰うんだね。ああじゃ後ほど、さよなら。（切る）

松井 総理大臣の親任式っていうのはどのくらい時間かかるものでございましょうね。

智太郎 そんなこと知るかい。

松井 お前を親任するって天子様がおっしゃって、辞令をお渡しになるだけなんだろうから、大したことはないと思いますかね。

智太郎 僕に相談したって判るかい。宮内省にでも電話で聞いてみるよ。

松井 ああさようでございますね、ええと宮内省はと。（電話番号の控帳を繰ろうとする）

智太郎 馬鹿！ほんとににやける気か。

松井 （恥かしそうににやにや笑いながら）いいえ。（もじもじする）

智太郎 お前、お客様の送り迎えしなくていいのかい？

松井 ちゃんとそちらの方は本山さんが来てくださっ

てやっていますから今日は私は電話の方の専任でございます。

智太郎 勝手にしろ！（襖をやけになって閉める。本立の中から松井の学校のノートを手当り次第とって何も書いてない所を見つけて三枚ほどはぎ取る。墨汁と筆でそれに書く）絶対静粛。それから、出入厳禁。なおこれに違反するものは、何にしようかな、厳罰に処す、いけないな、そうだ鹹首せらるべしがいい。（この三枚を襖の外に張出す、意地悪く笑っている）

松井 （最初は文面を読んでいるが用紙に気がつく）ああ智様、この紙、何をお破りになりました？ ワラ半紙がありましたのに。法制のノートでございますか、そうだとすると先生に出すんでございますから、綺麗にしておきませんと……。

智太郎 絶対静粛、違反するものは鹹首せらるべし。

松井 （だまって腰掛けて、悲観している）

智太郎 （恐しい大きな声で深刻なといった身振をして）ああそうじゃない！ おい俺の目を見てくれ！俺は自分のいったことが本当だといわないぞ、この世の中に本当のことなんか無いものだぞ！ ベルトルド！

さあ俺の目を見てくれ、いいかどうか？ 判ったか？ お前にはまだ俺が氣違ひに見えるものだからお前の目は恐怖に満ちているぞ！ その眼が何よりの証拠だ（氣味悪く笑う。先ほどから松井は打消しながらも心配になって、立上ってそと襖の間から中をのぞいていたのであるが、すっかりあわてる）お前にはまた俺が氣違ひに見えてきたので狼狽（ろうた）えているのだ！ お前は俺を今まで氣違ひだと思っていたのだ！ そうじゃないのか？

松井 （電話が鳴るので出る）はあはあさようでございます。藤原でございます。

智太郎 うるさい！ 黙れ。

松井 はあ、いいえ、そんなことまだ別段なんともお話はないようですが、ですから何大臣とも判りませんです。はあはあ。

智太郎 余計なことをいうな！

松井 電話もかかりませんし、お使いの方もいらっしやいませんが、全然そういうことはございません。

智太郎 早く切れよ！

松井 まだお客様とご面会中でございます。

智太郎 さようならと早くいうんだ！

松井 さあ、お客様のお名は申しあげられませんが、お家の方から私が怒られますから。

智太郎 つまらないことをいうなったら！

松井 奥様にご面会でございますか、それはできませんです。

智太郎 (襖のところまで出て来て) 今度は奥さんか。

松井 いいえご外出ではありません。はあ、ご病氣ではないんです。ええ。

智太郎 一昨年の暮に亡くなりましたといえはいいいじゃないか。

松井 いらっしやいませんです、いいえご旅行ではないのでございますが……。

智太郎 旅行さ、大旅行さ。十万億土へ帰らぬ旅だよ。

早く切り上げろったら、くどくどいわないで。

松井 お亡くなりになりましたんです、はあはあお死に遊ばしたんです、そうです、はあではさよなら、失礼いたしました。

智太郎 何が失礼なもんか、馬鹿々々しい。新聞記者だろう。しつっこい奴ってありゃしない。

松井 さようでございます、婦人欄の記者でございます。

智太郎 何新聞の？

松井 さあ、聞きとれませんでしたけど、きっと新大臣の夫人のことを書くんでございましょう。

智太郎 まだ大臣なんかになっていないのにね。

松井 もうおなりになったも同然でございますからでしょう。

智太郎 なんだ、なったっていつも伴食大臣ばかりじゃないか。親爺のなるのったら、無能だけとただ生きのびたから順番がきただけの話さ。

松井 そんなことはございせんよ、通信大臣の時は人情大臣ってたいした評判でございましたからね。あの頃は私まだ田舎におりましたけれど、よく田舎の新聞に出ましてよく読みました。

智太郎 そんなのは俗受けていうんだよ、何も政治的手腕に関係なんかないさ。人情が厚くたって何にもないやしないよ。

松井 ともかく立志伝中の方ですから私は閣下を崇拜いたしますね。

智太郎 何が立身出世なもんか。

松井 だってお豆腐屋から大臣におなりになればたいした出世でございますよ。

智太郎 馬鹿だなあ、また野間清治の出してる雑誌にでもそんなことが書いてあったんだろう。人聞きが悪いじゃないかお豆腐屋だなんて、ありや嘘なんだよ。太学へ行つてた頃お豆腐屋の二階にいたんだよ。親爺はそいで面白半分二三べん天ピン棒をかついだことがあるんだ。それだけだよ、豆腐屋なんかじゃないよ。

松井 ああさようでございますか。私すっかり信じていたんでございますが、へえ、ああそうだったんでございませうね。

智太郎 お前の家はなんなんだい。

松井 はあ？ じつはお豆腐屋をしているのでございます。

智太郎 道理で今悲観したわけだな。

松井 (電話が鳴るので出る) はあはあ、さようでございます。はあ、ご家族でございますか、奥さんはお亡くなりになりました藤原閣下とお子さんがお一人でございます。男でいらっしやいます、ええお年は二四

歳、学校はもうおやめになりました、はあ、いいえ、ご卒業ではありませんので。

智太郎 馬鹿！

松井 中途でおやめになりましたんで、いいえ、家でブラブラしておいででございます。

智太郎 おい、何いうんだ、僕はちゃんと仕事を持つてゐるんだぞ。人生座っていう劇団をやつてゐるんだ。二月目ごとに公演してゐるんじゃないか。

松井 もしもしちがいました、もしもしお芝居のほうを、劇のほうをやつていらっしやいますんです。ああもう切れてしまいました。

智太郎 お前みたいな奴は書生なんかできないんだ。結局豆腐屋だよ、未来は總理大臣なんて夢見たつて、何になれるものか。

松井 私はただそういう決心でやつているのでございますよ、それはなれなくても仕方がございません。

智太郎 ともかく芸術家を軽蔑するのだけはやめて欲しいね。ブラブラしてゐるなんて、僕は毎日ほとんど徹夜で稽古してゐるんだからね。今日なんかは三時から舞台稽古だけどそれまでの時間だつて無駄にしないで悪い

コンディションの中で稽古を憶えこんでるんじゃないか。ただそれをお前たちが邪魔するだけのことさ。

松井 はい判りました、もう軽蔑しませんでした、崇拜いたします。

智太郎 また崇拜か、崇拜しなくても少しは尊敬するもんだよ。

松井 はあ、どうも失礼いたしました。どうも私は正直なものですから、ついほんとのことをいってしまっているでございます。

智太郎 ほんとのことじゃないよ。ブラブラなんて、嘘だよ、間違いだよ、認識不足じゃないか、そうだろう。

松井 さようでございますかね。

みよ (ちよっと顔を出して) 松井さん来てください。

松井 (奥へ入る)

智太郎 (襖を閉めて部屋に戻ろうとすると電話がなるので出る) もしもしそうです、はあ、チュッまた新聞記者だ。はあはあ家族ですか、ええ主人と息子の二人ですが。息子ですか、また学校を聞きやがる。切っちゃえ! (電話を切る。と鈴が鳴る。またはずして手に

持ってしばらく考えているが電話器の下のカギに受話器をかけてしばらく放っておくが「もしもし」といっているのが聞えるらしくイライラしている。急に思いついて卓上電話に通じるスイッチを入れて受話器はもとに戻してかける。眺めた所すっかり切れてしまっているように見える) いつまでたってもお話中だ。(部屋に戻り科白を言い出す。襖の方に向って言い聞かせるように指を挙げて言う) まあいつてみればこうなるのじゃ。自分の身の全然任ねてしまわない時に願望が湧いてくる。ある女が男になりたいと思う。うむ、ある老人が再び若者になりたいといったとしてもよろしいのじゃ。

この所に松井が一人の男を案内して来る、男は例の張紙を見て気にするが松井が襖を開けて入るようにするので入る。と中にいる男は自分に向って指を挙げて妙なことを言うのでドギマギする、気違いかなと思う。

男 入ってもよろしいのですかな。(東北訛りで言った